

平成22年 5月10日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19730388  
 研究課題名（和文）反社会的行動を導く内的過程に関する研究  
 —社会的情報処理と情動制御に基づく検討—  
 研究課題名（英文）Dual intra-process model of social-information processing and emotion regulation predicting antisocial behaviors  
 研究代表者  
 吉澤 寛之（YOSHIZAWA HIROYUKI）  
 岐阜聖徳学園大学・教育学部・准教授  
 研究者番号：70449453

研究成果の概要（和文）：本研究では、社会的情報処理と情動制御の2側面から反社会的行動が生起する二重内的過程を包括的にモデル化し、その発達的变化と適応的な方向での様態を明確化した。さらに、これらの二重内的過程に影響を与える要因を、近接的要因（友人、家族、学校など）と遠隔的要因（社会環境や社会システム）の両面から同定する調査を実施し、それらの影響過程を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This project proposed the dual intra-process model of social-information processing and emotion regulation predicting antisocial behaviors. A series of studies clarified developmental trajectories and adaptive mode of these processes. We also identified proximal (e.g., friends, families and schools) and distal (social environment and social systems) factors affecting the development of these processes.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	0	1,400,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	570,000	3,870,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会心理学、犯罪心理学、反社会的行動、社会的情報処理、情動制御、社会環境、発達的变化、社会的適応

## 1. 研究開始当初の背景

子どもを取り巻く環境による教育力の低下を背景とした、社会の安全を脅かす凶悪な犯罪や非行が増加の一途をたどっている（法務省法務総合研究所，2004）。こうした反社会的行動の凶悪性の背後には、社会を捉える認識の問題としての社会的情報処理の誤り

や歪み、利己的な行動をコントロールする際の問題としての自己制御能力の低下が存在していることが推察される。申請者はこれまで、青年を対象に社会的情報処理の問題が反社会的行動を生起させる過程について検討を行ってきた。

これらの研究は、反社会的行動を導く社会

的情報処理過程の問題を明確にし、情報処理の問題を修正することで反社会的傾向を改善させる可能性を見出したという点で、一定の成果を得たと考えられる。しかし、社会的情報処理、すなわち認知的側面の問題のみに焦点付けたこれまでの研究には限界があり、個人の情動的側面を含めた二重内的過程 (dual intra-process) の包括的な検討が必要である。また、これまでの研究では、反社会的行動との関連から社会的情報処理の適応的な様態を解明してきたが、一方で向社会的行動などの適応的行動を導く情報処理のあり方や、情報処理そのものの発達の変化に関しては明らかにされていない。さらに、友人・仲間集団との相互影響や学校場面における心理教育プログラムは、個人の情報処理に直接的な影響を与える近接的要因として考えられるが、同時に社会システムや社会環境などの遠隔的要因によっても個人の情報処理のあり方は影響を受けるものと考えられる。

## 2. 研究の目的

反社会的行動の生起過程における情動的側面を含めた包括的な内的過程のモデル化の可能性については、Lemerise & Arsenio (2000) が、社会的情報処理モデルに対して情動プロセスを組み込むことで、各情報処理段階において情動が及ぼす影響を明確に整理している。情動的側面を内的過程モデルに組み込むにあたり、本研究では情動的行動を脳機能と関連づけて再解釈した Gray, J. A. の理論を参考とする (Gray, 1982, 1987)。同理論では、行動を制御するシステムに2つを仮定している。一方は環境との能動的な相互作用を駆り立てる行動賦活システム (behavioral activation system: BAS) であり、接近、逃避、能動的回避などの行動が該当する。もう一方は行動抑制システム (behavioral inhibition system: BIS) であり、環境条件と行動の結果予期との間に不一致が生じる場合に、行動反応を制止もしくは減少させるシステムである。近年の研究では、これらのシステムを質問紙で測定する方法が開発されており、脳波検査、神経画像技術、自律神経系の活動を測定する方法などを用いた指標との関連からその妥当性が確認されている (Carver & White, 1994)。本研究では、認知的側面である情報処理指標に加え、Carver & White (1994) の尺度を参考とした情動制御過程の測定指標を開発し、反社会的行動を生起させる二重内的過程を検証する。内的過程間には、BAS と BIS に対応する情動制御過程に対して情報処理がより高次のレベルで制御機能を果たす階層性と、情報処理に対しても情動制御過程がボトムアップ的に影響する双方向性が想定される (cf.

Kochanska et al., 1998)。

二重内的過程の発達の変化と適応の様態に関しては、上記モデルを用いてその発達の変化を横断的に検討し、適応的行動指標との関連から適応的な様態を明確化する。先行研究においては、社会的情報処理が反社会的行動を生起させる因果モデルにおいて、中学生と高校生及び大学生との間に発達の差異が確認されている (吉澤・吉田, 2005a, 2005b) が、それらの差異が生物学的な発達変化によるものなのか、学習・経験などの環境的な影響による変化であるのかは明確にされていない。したがって、内的過程の変化に影響する環境的影響要因を統制し、生物学的な発達の相対的寄与を明らかにすることで、逆説的に環境からの介入による改善可能性を検討する。また本研究では、適応的行動指標として向社会的行動や友人関係適応を測定し、情報処理指標や情動制御指標との関連を検証する。

二重内的過程への影響要因に関して、本研究では近接的要因と遠隔的要因の2つの枠組みで各要因を整理する。これまでの研究で扱われてこなかった他の近接的要因としては、初期の家族による社会化の影響が考えられる。家族との幼いころからの交流の中で、自分の価値観や考え方を相対化して捉える機会や、自己の行動が周囲の他者を含む環境全体に与える影響を想像できる機会を与えることが、社会的情報処理の誤りと歪みや情動制御の問題を修正するうえで、重要な役割を果たすと予想される。したがって、本研究ではこれらの経験の有無が、内的過程の適応性に与える影響を検討する。さらに遠隔的要因としては、対人的相互作用の希薄化や社会的規範の不明確化に代表される社会環境的要因の影響を検討するため、Sampson et al. (1997) により提唱された集合的有能感 (collective efficacy) を中心的指標として用いる。集合的有能感とは、近隣の住人が居住者の共通の価値観を認識し、効果的な社会的コントロールを維持する際の弁別的な能力とされる。本研究では、集合的有能感や共同体が有する資源などの特徴が反社会的行動の生起に及ぼす影響に関して、上述の二重内的過程の個人差要因を媒介した過程 (社会化の失敗) と、反社会的行動を誘発する日常活動としての状況的要因を媒介した過程 (環境の不備) の2つのルートを想定したモデルを検証する。さらに、集合的有能感の差異を明確化するため、個人主義文化と集団主義文化とで比較文化的検討を行う。

## 3. 研究の方法

### (1) 二重内的過程のモデル化

反社会的行動を生起させる二重内的過程を明らかにするため、情動制御過程を測定す

る指標を開発する。既存の尺度としては Carver & White (1994) による “The BIS/BAS Scales” があるが、この尺度は気質的側面を重視する尺度であり、心理教育的介入に対して具体的な方略を提示可能であるかといった点に疑問が残る。したがって、本研究では介入への具体的な示唆を提供できるように、社会的場面における自己制御の情動プロセスを測定可能な質問紙尺度を開発した。具体的には、情動プロセスを含めた社会的場面における自己制御能力の測定が可能な社会的自己制御尺度を開発した。同尺度では下位因子として、自己主張と自己抑制の2側面を想定しており、それぞれが社会的場面における自己制御の調整能力を反映する項目で構成されている。そのため、将来的な介入プログラムの開発や実施の際には、具体的レベルでの介入方略の考案を目的として、尺度項目を役立てることが可能である。

本研究では、既存の社会的情報処理の測定法、開発された情動制御過程の測定尺度と反社会的行動に関する測定尺度を実施して、認知的側面と情動的側面の相互作用が反社会的行動を生起させる内的過程について、構造方程式モデリングを用いたモデル化を行った。

#### (2) 二重内的過程の発達の变化

反社会的行動に影響する二重内的過程の青年期における発達の变化を検討するため、中学生から高校生にわたる横断的調査を実施した。既存の社会的情報処理の測定法は、小学生から大学生のすべての年齢層に対応可能な複数のバージョンが作成されているため、社会的自己制御尺度を加え、各年齢層を対象とした測定を行った。

#### (3) 二重内的過程による適応性の予測

適応的な行動指標の関連については、主に向社会的行動や友人関係適応との関連を検討した。二重内的過程に関して、とくに情報処理指標と向社会的行動との関連を検討するため、それぞれに該当する尺度を中学生と高校生を対象に実施した。友人関係適応に関しては、従来の研究で主に測定されてきた主観的な関係評価だけではなく、ソーシャル・ネットワーク分析の手法を参考とした客観的な友人関係の指標に関しても測定を行った。主観的な関係評価のみでは、友人や仲間集団との質的な関係の良好さを測定するにとどまるが、ネットワーク分析による指標では、集団内におけるその個人の地位やその個人が他成員に対して持つパワーを測定することが可能であり、客観的にみた個人の友人関係における適応性を多様な側面から指標化することが可能である。

#### (4) 二重内的過程への近接的影響要因

二重内的過程への近接的な影響要因であ

る初期の家族による社会化に関して、従来の研究では、一貫していない厳しいしつけ、厳しい体罰、親子関係におけるぬくもりの欠如といった問題が子どもの反社会性と関連することが示されている (e.g., Dodge & Pettit, 2003)。しかし一方で、子どもの社会認識や感情のコントロールの仕方に対して、親が直接的にどのような情報的影響を与えているかといった視点からの研究は少なく、適切な情報処理や情動制御の育成に寄与する具体的な社会化の方略は明らかにされていない。本研究では大学生とその養育者を対象とした回顧法による調査を実施し、主に親との相互作用のなかで社会認識に関連する会話がどのようになされたのか、さらには情動を制御する具体的なしつけをどのように受けたかといった2つの側面に注目し、こうした相互作用とこれまでの研究で開発された情報処理や情動制御の指標との関連を検討した。

#### (5) 二重内的過程への遠隔的影響要因

二重内的過程への遠隔的な影響要因である社会環境的要因に関して、社会的情報処理アプローチに基づく従来の研究では、主に地域共同体での暴力との接触による社会的学習のメカニズムが強調されることが多く、共同体の全体的な特徴が個人の内的過程の形成を中心とした社会化にどのような影響を与えているかについては包括的な検討がなされていない。さらに先行研究全体を通じた問題点として、社会システムや文化が等質な同一の国家内において異なる共同体間の比較がなされているのみであり、社会システムや文化が異質な複数の国家間で共同体間の比較を行うという方法が採用されていない。したがって本研究では、集合的有能感と共同体の有する資源に代表される共同体の特徴が反社会的行動の生起に及ぼす影響に関して、社会的情報処理及び情動制御による内的過程の個人差要因を媒介した過程と、反社会的行動を誘発する状況的要因（日常活動）を媒介した過程の2つのルートを想定したモデルを検証した。個人レベル、共同体レベル、国家レベルの3レベルごとに、階層線形モデルもしくは構造方程式モデルを用いて比較分析を実施した。具体的に国内の調査では、集合的有能感は Sampson et al. (1997)、日常活動は Osgood et al. (1996) による尺度を改訂することで測定した。共同体資源は警察庁及び総務省において公開されているデータを収集した上で、調査協力者の居住データとマッチングさせることで指標を算出した。複数の国家間の比較研究に関しては、アメリカ、韓国、中国、日本の5カ国の大学生を対象に調査を実施した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 二重内的過程のモデル化

社会的情報処理と社会的自己制御による反社会的行動の予測性を比較する分析を行った結果、前者の予測力が高いことが示された。したがって、構造方程式モデリングを用いた因果関係の分析を行ったところ、社会的情報処理が社会的自己制御を規定することで反社会的行動に影響を及ぼすという、社会的自己制御による媒介モデルの存在が示唆された。

##### (2) 二重内的過程の発達的变化

社会的情報処理を中心に、その発達の差異を中学生と高校生との比較により検討した。その結果、社会的ルールが知識として内在化されている程度を反映した構造的側面の指標を中心として、中学生よりも高校生が高い値を示すという発達の差異が確認された。

##### (3) 二重内的過程による適応性の予測

向社会的行動の予測性を、中学生と高校生とで比較した。両サンプルを比較する構造方程式モデリングを用いた分析を実施した結果、高校生においてのみ、知識構造の構造的側面が認知的歪曲を媒介して向社会的行動を促進することが明らかとなった。

友人関係適応との関連については、社会的情報処理指標とソーシャル・ネットワーク分析を用いて測定した客観的な友人関係の指標との関係を検討した。分析の結果、関係適応性を予測する上で、情報処理指標における知識の内在化の程度を反映した単純な指標はポジティブな影響を及ぼす一方、複雑な構造化の程度を示す指標はネガティブな影響を及ぼしていた。本結果から、知識の内在化の程度は、社会的行動と関係適応とは異なる影響を及ぼす可能性が示唆された。

##### (4) 二重内的過程への近接的影響要因

統制的な養育態度が社会的情報処理の適応性を高める一方、応答的な養育態度は社会的自己制御における持続的対処や根気を高めることが確認された。しつけに関しては、社会的場面で良いおこないを褒めるしつけを行うことが、適切な自己主張能力を高めることが見出された。

##### (5) 二重内的過程への遠隔的影響要因

社会環境の特徴として集合的有能感と共同体暴力経験の2側面に着目し、個人の社会化の良好さを反映する社会的情報処理と情動制御の指標を媒介することで、反社会的行動に影響を及ぼす過程を検証した。分析の結果、本研究の媒介過程に関する仮説は支持され、社会環境は直接的に反社会的行動を誘発するのではなく、当該地域における子どもたちの社会化を失敗させることで、間接的にその子どもたちの反社会的傾向を高めることが確

認された (Figure 1)。

さらに、集合的有能感と共同体暴力経験からなる社会環境の特徴が、個人の社会化の良好さを反映する社会的情報処理と情動制御の指標を媒介することで、反社会的行動に影響を及ぼすモデルの国際比較を行った。日本、韓国、中国、米国の4か国の比較から、一貫して社会的情報処理を媒介するモデルが支持されることが明らかとなった。併せて、複数国で実施した調査結果において、住民の社会経済的地位や地域移動率などの社会構造要因を統制してもなお、地域の集合的有能感や共同体における暴力事象との直接的な遭遇が、当該地域の子どもの社会化に有意な影響を及ぼすことが確認された。

国内の多様な地域の中学生を対象にサンプリングした地域階層的データに対して多段共分散構造分析を実施し、学校単位での集合的有能感が、同じく学校単位での生徒の社会的情報処理に及ぼす影響を検討した。学校レベルの分析から、学校間の集合的有能感の分散が、その校区に住む生徒の認知的歪曲や逸脱行為の悪質性を軽視する傾向の分散を有意に説明することが明らかとなった。同調査において、地域社会の集合的有能感を高める要因として、地域住民同士の私的交流と公的交流の影響を検討した結果、私的交流と公的交流のいずれもが集合的有能感の醸成に貢献していることを確認した。

本プロジェクトでは、社会的情報処理と情動制御の2側面から反社会的行動が生起する二重内的過程を包括的にモデル化し、その発達的变化と適応的な方向での様態を明確化したうえで、内的過程に影響を与える要因を近接的要因と遠隔的要因の両面から同定した。本プロジェクトで得られた知見は、多様な影響要因を同時に検討することの重要性が指摘されている反社会的行動研究に有益な示唆を提供するだけではなく、影響要因の区分を明確化することで、ミクロな個別の対応とマクロな社会システムの対応の双方の視点から、総合的に反社会的行動を減少する施策へのヒントを提供するものである。

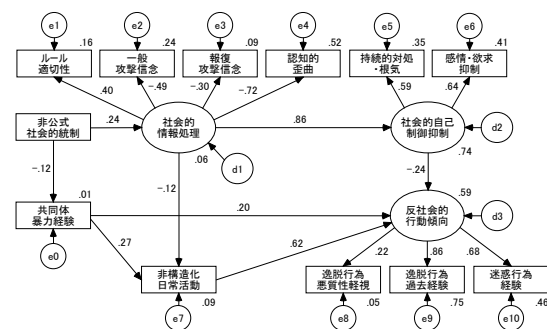


Figure 1 二重内的過程による媒介モデル

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 吉澤寛之、吉田俊和、中高生における親友・仲間集団との反社会性の相互影響—社会的情報処理モデルに基づく検討—、実験社会心理学研究、査読有、2010、50巻1号、印刷中
- ② 尾関美喜、吉澤寛之、中島 誠、吉田琢哉、原田知佳、吉田俊和、地域住民との社会的交流が子どもの向社会的行動に及ぼす影響—地域からの恩恵と地域への愛着による媒介モデル—、名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学)、査読無、56巻、2009、1-9
- ③ 原田知佳、吉澤寛之、吉田俊和、自己制御が社会的迷惑行為および逸脱行為に及ぼす影響—気質レベルと能力レベルからの検討—、実験社会心理学研究、査読有、48巻2号、2009、122-136
- ④ 吉澤寛之、吉田俊和、原田知佳、海上智昭、朴賢晶、中島 誠、尾関美喜、社会環境が反社会的行動に及ぼす影響—社会化と日常活動による媒介モデル—、心理学研究、査読有、80巻1号、2009、33-41
- ⑤ 原田知佳、吉澤寛之、朴賢晶、中島 誠、尾関美喜、吉田俊和、社会的自己制御の形成要因の検討—地域の集会的有能感および暴力事象との接触頻度に着目して—、名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学)、査読無、55巻、2008、127-135
- ⑥ 尾関美喜、朴賢晶、中島 誠、吉澤寛之、原田知佳、吉田俊和、社会環境が子どもの向社会的行動に及ぼす影響、名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学)、査読無、55巻、2008、47-55
- ⑦ 原田知佳、吉澤寛之、吉田俊和、社会的自己制御(Social Self-Regulation)尺度の作成—妥当性の検討および行動抑制/行動接近システム・実行注意制御との関連—、パーソナリティ研究、査読有、17巻1号、2008、82-94
- ⑧ 吉澤寛之、特集1 迷惑行動をなくすには迷惑行動をなくす地域社会の在り方、教育と医学、査読無、56巻10号、2008、4-12
- ⑨ 吉澤寛之、吉田俊和、社会的情報処理の適応性を促進する心理教育プログラムの効果—中学生に対する実践研究—、犯罪心理学研究、査読有、45巻2号、2007、17-36

[学会発表] (計38件：代表発表のみ記載)

- ① Yoshizawa, H., Nakajima, M., Yoshida, T., Harada, C., & Tsuchiya, K.、Flexibility of hierarchical goals in contextual change: Goal deactivation by contextual constraints.、Society for Personality and Social Psychology、2010年1月、Las Vegas, Nevada.
- ② 吉澤寛之、原田知佳、朴賢晶、中島 誠、尾関美喜、吉田俊和、社会環境が社会的行動に及ぼす影響(13)—社会化要因を媒介した反社会的行動規定モデルの国際比較—、日本社会心理学会、日本グループ、ダイナミックス学会、2009年10月、大阪大学
- ③ 吉澤寛之、中島 誠、吉田琢哉、尾関美喜、原田知佳、吉田俊和、社会環境が社会化に及ぼす影響(1)—地域間階層的データによる社会的情報処理への影響比較—、日本社会心理学会、日本グループ、ダイナミックス学会、2009年10月、大阪大学
- ④ 吉澤寛之、社会化と日常活動を媒介した反社会的行動への影響—社会環境が子どもの行動に及ぼす影響(自主シンポジウム話題提供)、日本教育心理学会、2009年9月、静岡大学
- ⑤ 吉澤寛之、親の養育態度が社会的情報処理と自己制御に及ぼす影響—内的機制としての自我状態による媒介モデルの検討—、日本教育心理学会、2009年9月、静岡大学
- ⑥ 吉澤寛之、中島 誠、吉田琢哉、原田知佳、土屋耕治、階層的目標の状況変動性(1)—状況制約による目標不活性化仮説の検証—、日本心理学会、2009年8月、立命館大学
- ⑦ Yoshizawa, H., Harada, C., Yoshida, T., Nakajima, M., & Tsuchiya, K.、Inhibitory action of regulatory functions on externalizing problem behaviors: Focusing on the distinctiveness of cognitive and temperament/personality concepts.、Society for Personality and Social Psychology、2009年2月、Tampa, Florida.
- ⑧ 吉澤寛之、海上智昭、原田知佳、朴賢晶、中島 誠、尾関美喜、吉田俊和、社会環境が社会的行動に及ぼす影響(12)—社会環境が社会的情報処理に及ぼす影響力の国際比較—、日本社会心理学会、2008年11月、かごしま県民交流センター
- ⑨ 吉澤寛之、吉田俊和、仲間集団レベルでの反社会性の共有—社会的情報処理モ

デルを用いた検討一、日本犯罪心理学会、2008年10月、国立オリンピック記念青少年総合センター

- ⑩ 吉澤寛之、吉田琢哉、原田知佳、中島 誠、土屋耕治、自己制御能力の弁別的予測性に関する研究(5)―実行機能を統制した自己制御の問題行動への影響―、日本心理学会、2008年9月、北海道大学
- ⑪ Yoshizawa, H., Harada, C., & Yoshida, T., Dual intra-process leading antisocial propensity: The prediction power of social information-processing and self-regulation. , International Congress of Psychology, 2008年7月、Berlin, Germany.
- ⑫ 吉澤寛之、中島 誠、土屋耕治、吉田琢哉、原田知佳、自己制御能力の弁別的予測性に関する研究(1)―実行機能の問題行動への影響―、日本グループ、ダイナミックス学会、2008年6月、広島大学
- ⑬ Yoshizawa, H., & Yoshida, T., Effects of prosociality on best friendships and group relationships focusing on relational qualities and social networks. , Asian Association of Social Psychology, 2007年7月、Sabah, Malaysia.
- ⑭ 吉澤寛之、海上智昭、原田知佳、朴賢晶、中島 誠、尾関美喜、吉田俊和、社会環境が社会的行動に及ぼす影響(10)―個人の社会化要因を媒介した反社会的行動規定モデルの検証―、日本社会心理学会、2007年9月、早稲田大学
- ⑮ 吉澤寛之、原田知佳、吉田俊和、社会的情報処理と自己制御との関連―情報処理の中心的処理と周辺的処理による関連の差異―、日本心理学会、2007年9月、東洋大学
- ⑯ 吉澤寛之、海上智昭、原田知佳、朴賢晶、中島 誠、尾関美喜、吉田俊和、社会環境が社会的行動に及ぼす影響(4)―集合的有能感及び共同体暴力経験が社会的逸脱行為に及ぼす影響―、日本教育心理学会、2007年9月、文教大学
- ⑰ 吉澤寛之、原田知佳、吉田俊和、反社会性を規定する個人内過程の差異―社会的情報処理と自己制御の比較検討―、日本犯罪心理学会、2007年9月、福島大学
- ⑱ 吉澤寛之、海上智昭、原田知佳、朴賢晶、中島 誠、尾関美喜、吉田俊和、社会環境が社会的行動に及ぼす影響(1)―集合的有能感及び共同体暴力経験が社会的情報処理に及ぼす影響―、日本グループ、ダイナミックス学会、2007年6

月、名古屋大学

〔図書〕(計4件)

- ① 吉澤寛之、ナカニシヤ出版、第11章 社会的情報処理と逸脱行動 吉田俊和・斎藤和志・北折充隆(編) 社会的迷惑の心理学、2009、総200頁、pp. 165-179.
- ② 吉澤寛之、丸善株式会社、6. 对人的影響 没個性化 日本社会心理学会(編) 社会心理学事典、2009、総700頁、pp. 238-239
- ③ 吉澤寛之、丸善株式会社、10. 大衆現象・犯罪 犯罪・非行とラベリング理論 日本社会心理学会(編) 社会心理学事典、2009、総700頁、pp. 400-401
- ④ 吉澤寛之、吉田俊和、北大路書房、第10章 社会規範と逸脱 大淵憲一(編) シリーズ 21世紀の社会心理学 13 葛藤と紛争の社会心理学、2008、総146頁、pp. 108-121

〔その他〕

ホームページ等

[http://www.shotoku.ac.jp/soran/user\\_record.php?usersPage=14&u\\_id=61](http://www.shotoku.ac.jp/soran/user_record.php?usersPage=14&u_id=61)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

吉澤 寛之 (YOSHIZAWA HIROYUKI)  
岐阜聖徳学園大学・教育学部・准教授  
研究者番号：70449453

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：